29

京都岩倉において精神病者家族的看護を可能にしたもの

――大岩、阿波井との比較において

中村　治
大阪府立大学人間社会学部

京都洛北の岩倉には、後三条天皇（位一〇六八年～一〇七二年）の第三皇女が精神病になった時、岩倉の大雲寺の観世音に祈願し、大雲寺の井戸水を飲んでいたところ、その病が治ったという伝承（「御香水之由来」）があり、江戸時代には精神病者が集まり、農家や茶屋などに宿泊して、観世音に祈願し、大雲寺の井戸水を飲み、宝永六年（一七〇九）に整備された滝垢離場で滝に浴して、看護されていた。明治時代になると、岩倉にも病院ができ、明治三三年（一九〇〇）には精神病者監護法によって、茶屋や農家における精神病者預かりが禁止されたが、それでも茶屋や農家における精神病者預かりはなくならなかった。岩倉におけるこのような精神病者家族的看護は、十九世紀末のヨーロッパにおいて急増する精神病者数とかさむ看護費用に対処するために家族的看護が高く評価されたのを受け、呉秀三が『精神病学集要』（一八九五年）においてそれを紹介したころから有名になった。そして明治三九年（一九〇六）にロシア人医師スチーダが、明治四二年（一九〇九）にアメリカのコロンビア大学精神学教授ピーターソンが、昭和五年（一九三〇）にドイツのハンブルグ大学教授ヴァイガントが岩倉を訪れ、家族的看護に好意的な感想を残し、岩倉における精神病者家族的看護はさらに有名になって、昭和初期にその最盛期を迎えたのであるが、第二次世界大戦とそれにともなう食糧難によって、ほぼ消滅したのであった。

ところで欧米では、その後、家族的看護で行えるような開放的処遇は、改善が進む精神病院ではすでに実現されているというような議論が優勢になり、病院建設が推進されるようになっていたが、向精神薬の導入と脱施設化政策により、一九六〇年代から精神科病床数が急激に減らされた。日本でもそれよりかなり遅れ

て脱施設化の必要性が認識され、地域において精神病者を看護することが最近ではかられてきているが、それが容易ではないことがわかってきている。そこでかつて精神病者を一般家庭において預かっていた岩倉がまた注目を集め始めている。いったいどのようにして精神病者が集まり始め、茶屋や農家においてどのように看護されていたのかを調べることにより、地域において精神病者を看護する方法に関する手がかりをえることができるのではないかと思われるからである。

しかしなぜ岩倉においては一般家庭において精神病者を預かることが可能であったのか。例えば呉は精神病者家族的看護を擁護しただけでなく、実際に東京で行おうとしたが、できなかった。一一世紀作の不動三尊（重要文化財）を持つ富山県大岩の日石寺には精神病者が多く集まり、寺の参籠所あるいは近くの宿屋に泊まり、祈祷を受け、近くの滝や明治元年（一八六八）に整備された六条の滝に浴していた。しかし大岩は、精神病者の家族的看護をするところとはならず、そこに精神病院もできなかった。また、徳島県鳴門近くの島田島にある阿波井神社には、江戸時代末には精神病者が参籠し、明治時代には島田島を鳴門から分ける小鳴門峡で水行をしていた。そして明治三二年（一八九九）頃、寄付金によって阿波井神社の脇に参籠所が造られ、昭和二年（一九二七）には阿波井神社の脇に阿波井島保養院が開院し、それは現在、鳴門シーガル病院となっている。しかし阿波井神社近辺では精神病者家族的看護は行われなかった。では岩倉において精神病者家族的看護を可能にしたものは何か。本発表では（一）精神病治療に関する伝説、（二）都会からの適当な距離、（三）地理的条件、（四）食糧事情、（五）里子預かりの伝統、（六）支配者側からの要請、（七）「患者を預かる人の患者に対する慣れ」、（八）「患者を預かることに対する地域の人の慣れ」などの観点からそれを考察したい。